

〔研究ノート〕

倫理学とは何か〔3〕  
—西洋哲学，倫理学と関連して—

浅井茂紀

目 次

I 序論

II 本論

第1節 18～19世紀のイギリスの哲学，倫理学

1. ベンサム（Jeremy Bentham）の功利主義

2. J.S.ミル（John Stuart Mill）の功利主義

第2節 プラグマティズム（Pragmatism）の哲学，倫理学

1. パース（Charles Sanders Peirce）—実用主義の創始者—

2. ジェームズ（William James）—真理論—

3. デューイ（John Dewey）—実験主義—

III 結論

## I 序論

論者は、前々回で、「倫理学とは何か [1]」<sup>(1)</sup>、そして、前回、「倫理学とは何か [2]」<sup>(2)</sup>と題し、発表した論文の続きとして、今回は、「倫理学とは何か [3] —西洋哲学、倫理学と関連して—」と題して考察してみる。その目次は前記の如しである。そして、「倫理学とは何か [3]」(以下、この論文では先のサブ・タイトルは時に省略する)の項目や内容の記述や説明をする。

ソクラテス (Sôkratês, 470/469—399B.C.) は、「無知の知」<sup>(3)</sup>、「真善美の一致」や「知徳福の一致」<sup>(4)</sup>などを主張した。

さらに、イギリスの経験論者 F.ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) は、「知は力なり」(Scientia est potentia; Knowledge is power.)<sup>(5)</sup>や帰納法などを強調した。

また、宗教上のイエス・キリスト (Jesus Christ) の「善人はよい倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から悪い物を取り出す。」(マタイによる福音書, 12—35)<sup>(6)</sup>、とあるキリスト教の根本的性格である愛 (agapê) の宗教、これらの認識や意識においても、この論文は、「倫理学とは何か [3]」と題して考察することも可能であると言えよう。

そこで、論者は、本論において、最初に、

1. 18～19世紀のイギリスの哲学、倫理学について、

(1) ベンサムの功利主義 (Utilitarianism) は、哲学や功利の原理を最大多数の最大幸福としたが、幸福とは何か、また、不幸とは何か、快樂の基準は何かなどを問題にする。

(2) J.S.ミルの功利主義は、ベンサムの原理を取り入れたが、両者の相違は何かを説明する。ミルは、なぜソクラテスの如く倫理的な生き方を望むかを問題にする。

2. プラグマティズム (Pragmatism) の哲学、倫理学について、

(1) パースは、論理学、観念、カテゴリーに触れている。ハーヴァード (Harvard) 大学出身の仲間と「形而上学クラブ」を作って、パース自身の言葉はプラグマティズム (Pragmaticism) であったが、プラグマティズムの基本構想を発表した事などの理由で以てプラグマティズム (Pragmatism)、実用主義の創始者ということを取り上げてみる。

(2) ジェームズは、純粹経験を配慮して、真理論を展開したが、彼の真理論とは何か。カントは、善意志 (guter Wille) という動機を重視したが、ジェームズの場合、動機、或いは、結果、どちらが重要かを問題にする。

(1) 拙稿「倫理学とは何か [1] —西洋倫理学と関連して—」(研究ノート)『千葉商大紀要』第40巻第3号、千葉商科大学国府台学会、2002 (平成14) 年12月31日発行、95—115ページ。

(2) 拙稿「倫理学とは何か [2] —西洋哲学、倫理学と関連して—」(研究ノート)『千葉商大紀要』第41巻第1・第2合併号、千葉商科大学国府台学会、2003 (平成15) 年9月30日発行、51—71ページ。

(3) プラトン『ソクラテスの弁明・クリトン』(久保勉訳)、岩波書店、昭和41年、21ページ。

(4) 拙著『哲学要論—哲学、中国哲学、倫理学—』、高文堂出版社、2002 (平成14) 年4月1日発行、36ページ。ソクラテスは、汝自身を知れ (gnôthi seauton.) はもとより、産婆術や魂の配慮、知行合一なども主張した。

(5) 注(4)参照。同書(拙著『哲学要論』)、第1節イギリス経験論、1. ベーコン (Francis Bacon)、53ページ。

(6) 国際ギデオン協会『新約聖書, New Testament』日本聖書協会、1976年、35ページ。A good man brings out good things from good treasure in his heart,

and a wicked man brings out bad things from bad treasure in his heart. (Matthew, 12—35).

(3) デューイは、大陸合理論や合理主義よりも、イギリス経験論、特に、F.ベーコンの経験を取り上げて帰納法の意義にも触れている。さらに、道具主義 (instrumentalism) や実験主義 (experimentalism) などの立場であることを問題にして説明する。

かくして、これら「倫理学とは何か [3]」の中身を記述し、そのシステムティックな体系化 (systematization) をなして、その意義を考慮してみたい。

次に、Ⅱ本論 第1節 18～19世紀のイギリスの哲学、倫理学

1. ベンサム (Jeremy Bentham) の功利主義から、論者は考察する。

## Ⅱ 本論

### 第1節 18～19世紀のイギリスの哲学、倫理学

#### 1. ベンサム (Jeremy Bentham) の功利主義

ベンサム (Jeremy Bentham, 1748—1832)<sup>(7)</sup>は、イギリスの功利主義者 (Utilitarian) である。ベンサムは、善とは快楽 (hedonic, pleasure) であり、幸福 (happiness) とは、快楽の状態である。反対に、悪とは苦痛 (pain) であり、不幸とは、苦痛の状態である。善悪は快楽と苦痛とに関係する<sup>(8)</sup>。

実用、功利の原理とは、人間は、快と苦の支配下にあって、利害関係者の幸福の増減により行動 (behavior) や行為 (conduct) の是非を決定する。功利の原理は、個人の行為だけでなく、国家の政策にも適用できる<sup>(9)</sup>。

市民の幸福は、功利の原理を道徳及び立法、行政の原理にまで拡大して達成される。その点、哲学や功利の原理を「**最大多数の最大幸福**」(the greatest happiness of the greatest number) と言える。また、最大多数の最大幸福が、道徳及び立法の原理であるとした。なぜならば、**ベンサムの功利主義** (Utilitarianism) は、個人の快楽や幸福に基礎を置く個人主義的功利主義 (Egoistic Utilitarianism) と呼ばれたが、公衆の快楽にも重点を置いた。社会や市民全体の倫理的な幸福が、この時代の要求であり、民主主義思想も発生してきたからでもあった<sup>(10)</sup>。

そこで、「**功利主義者**」(Utilitarian) とは、個人的行為や政府の政策における善悪の決定の場合、幸福の増減、功利の法則や原理に合致するか否かを決定する者をいう。

ベンサムの快と苦は、量的な区別を考慮しているが、しかし、デメリット (demerit)

(7) ベンサムの生涯について、ベンサム (Jeremy Bentham, 1748—1832) は、1748年、ロンドンに生まれた。弁護士の子。1760、オックスフォード大学 (University of Oxford) に入学。1768、プリーストリの政府論で、最大多数の最大幸福の言語を見出し哲学の原理とする。1772、弁護士。1776、『政府論断片』。1787、『高利擁護論』、A.スミスが賞賛。1789、『道徳と立法の諸原理序説』(An Introduction to the Principles of Morals and Legislation) 公刊。1824、『ウェストミンスター・レビュー』。1826、ロンドン大創設委員。1832年 (84歳)、永眠。

(8) 山田孝雄述『倫理学講義ノート』、44ページ。

Jeremy Bentham, <http://www.ne.jp/asahi/village/good/bentham.html>

(9) 渡辺義雄編『立体・哲学』朝日出版社、昭和50年、182ページ。

(10) 注(8)参照。山田孝雄述、前掲書、45ページ。

は質的な区別ではない。

従って、ベンサムにおいては、快苦の質 (quality) ではなくして、量 (quantity) としての区別だけなので快楽の計算や測定は可能となるのである。

ベンサムは、快楽 (hedonic) の量的計算や測定として、7つの基準を挙げている。強烈度 (intensity)、継続度 (duration)、確実や不確実 (certainty or uncertainty)、遠近度 (propinquity or remoteness)、多産性 (fecundity)、純粋度 (purity)、範囲 (extent) の7つである<sup>(11)</sup>。

これらの基準に照合して、最大多数の最大幸福を結果する行為を正や善と見なした。逆に、この基準に反するものは誤りで、哲学的真理や倫理、道徳に反するとした。さらに、功利の原理である「最大多数の最大幸福」をもたらす道徳及び立法、法律の制定を通して国家、社会の建設を意図したと言える。

◎ゆえに、ベンサム (Jeremy Bentham, 1748—1832) は、イギリスの功利主義者 (Utilitarian) である。善や幸福は快楽であり、哲学や功利の原理を「最大多数の最大幸福」 (the greatest happiness of the greatest number) に置いたと言えよう。快楽の量的測定に強烈度など7つの基準をあげて、道徳及び立法により国家の建設を意図したと、論者は考えるのである。

次に、2. J.S.ミル (John Stuart Mill) の功利主義について説明する。

## 2. J.S.ミル (John Stuart Mill) の功利主義

J.S.ミル (John Stuart Mill, 1806—1873)<sup>(12)</sup> は、イギリスの功利主義者 (Utilitarian) である。

ミルは、功利主義者ベンサム (Jeremy Bentham, 1748—1832) が強調した「最大多数の最大幸福」 (the greatest happiness of the greatest number) を原理とした。しかし、

(11) 注(8)参照。同書、45—46ページ。

なお、18～19世紀の思想家としては、アダム・スミス (Adam Smith, 1723—1790) [古典派経済学の創始者]、シャフツベリ (Shaftesbury, 1671—1713) 伯 [道徳哲学者、ロックの庇護者]、ハチスン (Hutcheson, 1694—1746) [道徳哲学者、A.スミスの師]、ベンサム (Jeremy Bentham, 1748—1832) [功利主義者]、J.S.ミル (J.S. Mill, 1806—1873) [功利主義者]、スペンサー (Spencer, 1820—1903) [社会進化論]、カーライル (Carlyle, 1795—1881) [英雄崇拜論]、グリーン (Green, 1836—1882) [自我実現説]、シジウィック (H. Sidgwick, 1838—1900) [功利主義者]、コント (A. Comte, 1798—1857) [実証主義、社会学の祖] などが実在した。今回の論文では、そのベンサムと J.S.ミルを取り上げて説明。

(12) J.S.ミルの生涯について、

J.S.ミル (John Stuart Mill, 1806—1873) は、1806年、ロンドンに生まれた。1822 (16歳)、ベンサムの原理による功利主義者の会、計画。1823、東インド会社入社。1843、『論理学体系』。1848、『経済学原理』。1851、テラー未亡人と結婚。1858 (52歳)、東インド会社退職。秋、夫人の死去。1859、『自由論』 (On Liberty)。1863 (57歳)、『功利主義』 (Utilitarianism)。1865、議員。1867、セント・アンドリュース大学総長。1873年 (67歳)、フランスに旅立ち、アヴィニョン (Avignon) で死去。

なお、ミルの『功利主義』 (Utilitarianism) は、西周 (1829—1897、文政12—明治30) では、『譯利学説』 (上下2冊、明治10年5月18日版權) の書名で翻訳されている。そして、道徳にモラルのルビをふり、智・情・意の意を道徳の学、以てこれを範する所なり、と記載が存在する。拙著『人間の理念と政治哲学』 (共著)、高文堂出版社、1995 (平成7) 年4月5日、124ページ。

当時、ベンサムの高快説には批判があった。高快を善として、高快を求めることが、人生の目的であるとする彼の学説は種々攻撃された。

そこで、ミルは、幸福とは高快及び無苦痛を意味し、不幸とは苦痛及び高快の欠乏を意味するのが功利主義という認識で以て反論した。功利主義者に対して、他の人々が高快のみを求めると非難するが、それは当たらないとした。他の人々は、高快といえば、身体的高快などを連想するが、人間は、哲学的な教養を積む程、高尚な精神的な高快を真の高快と思うからである。従って、哲人は、身体的高快は高快とは見なさないとする<sup>(13)</sup>。

けれども、ベンサムが、高快の量 (quantity) を考慮し、高快の測定に7つの基準を設定したのに対して<sup>(14)</sup>、J.S.ミルは、高快の質 (quality) をより考慮し明確に区別した点である。

高尚な人間は、多量の高快よりも、少量でも質のよい高快を欲する。

そこで、時には、満足している豚よりは不満足でも人間の方がよいともみなされる。

「満足している愚者よりは不満足なソクラテスの方がよい。」<sup>(15)</sup>、とする。まだ、満足している愚者よりは不満足なソクラテスの方が人間として倫理、道徳的な真実の生き方であるというわけである。なぜならば、人間は、尊厳、自尊心 (pride) や自由と独立の愛をもっているからである。もし、人間としてのプライドが傷つけられた場合、高尚、且つ、教養ある人は、どんなに多量の高快を与えられても満足することはないであろう、と見なしている。

結局、ミルは、倫理学 (Ethics) として、精神的な「功利主義」 (Utilitarianism) であった。功利主義者の目標は、個人的な幸福ではなく、自己の高快を犠牲にしてでも市民社会の最大多数の最大幸福である。それは、イエス・キリストの新約の黄金律<sup>(16)</sup>に功利主義的社会倫理の完全な規範精神がある<sup>(17)</sup>、と言われる理由でもあろう。

◎ゆえに、J.S.ミル (John Stuart Mill, 1806—1873) は、19世紀におけるイギリスの功利主義者 (Utilitarian) である。ミルは、ベンサムの最大多数の最大幸福を基本原理とし、ベンサムが高快の量 (quantity) を考慮したのに対して、ミルは、高快の質 (quality) をより考慮した点で意義があると言える。ミルは、「満足している愚者よりは不満足なソクラテスの方がよい」とした。倫理、道徳的な真実の生き方を念願したと、論者は考えるのである。

次に、第2節 プラグマティズム (Pragmatism) の哲学、倫理学

1. パース (Charles Sanders Peirce) — 実用主義の創始者 — から説明する。

(13) 注(8)参照。山田孝雄述、前掲書、46ページ。

(14) 注(8)参照。同書、45—46ページ。

(15) 注(8)参照。同書、47ページ。

(16) 注(4)参照。拙著、前掲書 (『哲学要論』)、51ページ。

(17) 注(9)参照。渡辺義雄編、前掲書、184ページ。



## 第2節 プラグマティズム (Pragmatism) の哲学, 倫理学

### 1. パース (Charles Sanders Peirce) — 実用主義の創始者—

パース (Charles Sanders Peirce, 1839—1914)<sup>(18)</sup> は, 論理学 (Logic), 三つの観念 (ideas) や三つのカテゴリー (category; Kategorie) などに触れている。

最初に,

**論理学** (Logic) … 3 分類している。

- (1) 思弁的文法…記号が意味をもつための形式的条件。命題の真理が成立する条件。
- (2) 批判的論理学…記号の真理の形式的条件。推論や証明も内包。
- (3) 思弁的修辭学…記号の力の形式的条件。記号が解釈者 (interpreter) に力を及ぼす条件。意味論でもある<sup>(19)</sup>。

**三つの観念** (ideas) … 3 分類している。

- (1) 1 次性の観念…知覚や感覚の観念。赤, 青, 黄色とかの観念。本体的な観念。
- (2) 2 次性の観念…行動の観念。能動者と受動者の観念。
- (3) 3 次性の観念…記号関係の観念。解釈者に表示する観念である。

**三つのカテゴリー** (category; Kategorie) …三つの観念に対応して各 3 分類している。

- (1) 1 次性のカテゴリー…質の範疇。質の種類, それ自体で成立。[可能性を示す]。
- (2) 2 次性のカテゴリー…現存の範疇。他と対立する。[現存性を示す]。
- (3) 3 次性のカテゴリー…媒介の範疇。質と現存的行動を媒介した各種タイプの習慣的法則。[運命 (destiny) を示す]。

パースのプラグマティズム (Pragmatism), すなわち, 実用主義は, 知的概念の意味を決定する方法である。概念の真理からの帰結の総和がその概念の意味を構成する。

ex. 「堅い」という概念の説明には, その種々の具体的な行動による説明も包含されようが, しかし, パースのいう行動は, 現実, 实际的にその「堅い」という行動の必要はなくてもよいとされる<sup>(20)</sup>。

従って, 単に, 考えられ, 想像できる (conceivable) だけでもよいのである。

◎ゆえに, パースが, 論理学, 三つの観念や三つのカテゴリーなどに触れ, 知的概念の意味を決定する方法であるアメリカ, プラグマティズム (Pragmatism), すなわち, 実用主義の創始者であったと, 論者は考えるのである。

(18) パースの生涯について,

パース (Charles Sanders Peirce, 1839—1914) は, 1839年, マサチューセッツ州ケンブリッジに生まれた。父親はハーヴァード大学 (Harvard University) 教授。沿岸測量部長。数学者。1859 (20歳), ハーヴァード大学 (Harvard University) 卒。1863 (24歳), 学位取得。後, 15年間, ハーヴァード観測所や沿岸測量部勤務。かたわら, 哲学の論文発表。1870 (31歳) 頃, 数人の仲間と「形而上学グループ」を作った。ジェームズもこの一員。ここで, パースは, プラグマティズム (Pragmatism) の基本構想を発表した。1879 (40歳), ジョンズ・ホプキンス大学論理学講師。1887 (48歳), 遺産相続。ペンシルバニア州ミルフォードに隠棲。1898 (59歳), ジェームズが, 講演の中で, プラグマティズム (Pragmatism) の創始者としてパースを紹介したこととで有名になった。1914年 (75歳), 死去。

(19) 注(9)参照。渡辺義雄編, 前掲書, 203ページ。

(20) 注(9)参照。同書, 204ページ。

次に、

2. ジェームズ (William James) —真理論—から説明する。

## 2. ジェームズ (William James) —真理論—

ジェームズ (William James, 1842—1910)<sup>(21)</sup> は、根本的経験論、真理論、プラグマティズムなどに触れている<sup>(22)</sup>。

(1) 根本的経験論…ジェームズは、根本的経験論を主張する。

大陸合理論の如く<sup>(23)</sup>、合理論は、全体から部分へ、普遍から特殊な個々への方法であった。つまり、演繹法により、法則や原理から事実当てはめられた。そして、全大系に真理が存在するとした。反対に、イギリス経験論の如く<sup>(24)</sup>、経験論は、特殊な個々の事実を観察、実験して、部分から全体の方法であった。つまり、帰納法により、事実から法則や原理を説明したのである。

ところで、従来の経験論者は、経験を多様な断片からなるものとした結果、まとまりのある経験を説明する場合、その断片を結合する原理を経験の外部から導入しなければならなかった。そこで、

ジェームズは、具体的な経験、「純粹経験」(pure experience) はものの断片の寄せ集めではなく、生命の流動であるとした。種々の事物や異なるタイプの関係は反省により抽象されたもので、断片を結合する原理を外部から持ち込む必要 (needs) はない。すでに、純粹経験の中に、結合され、結合する関係は共に内包されている。

純粹経験は、意識と無意識、主観と客観、心と物とが分離する以前の「中性的」経験であるとした<sup>(25)</sup>。

### (2) 真理論

ジェームズは、真理は事物の性質ではなく、観念の性質であると言う。真理であり、虚偽であったりするのは、事実に関する命題であり、事実それ自体ではないとした。

真理は有用であり、有用な (useful) ものは真理であるという真理論である。

ジェームズのプラグマティズム (Pragmatism) とは、観念や思想の意義を結果により決定する方法である。パースが、論理的、科学的であったのに対して、ジェームズは、

(21) ジェームズの生涯について、

ジェームズ (William James, 1842—1910) は、1842年、ニューヨーク (New York) に生まれた。1861、ハーヴァード (Harvard) 大学入学。生理学、医学など学ぶ。1864、ブラジル探検隊に参加。1866、ドイツに留学、実験生理学を研究。1869、医学部卒業。1872、ハーヴァード大講師。1876、助教授。1885 (43歳)、教授。1890、『心理学原理』。1902、『宗教経験の諸相』(*The Varieties of Religious Experience*)。1907 (65歳)、『プラグマティズム』(*Pragmatism*)。1909、『真理の意味』(*The Meaning of Truth*) 他、刊行。1910年 (68歳)、死去。『『哲学の諸問題』(*Some Problems of Philosophy*) (1911)、『根本経験論』(1912) は遺稿。

(22) 注(9)参照。渡辺義雄編、前掲書、205ページ。

(23) 拙稿「大陸合理論とカントの哲学—理性の重視—」(論説)『千葉商大紀要』第36巻第4号、千葉商科大学国府台学会、1999 (平成11) 年3月30日、43—61ページ。

(24) 拙稿「イギリス経験論とカントの哲学—経験の意義—」(論説)『千葉商大紀要』第23巻第3号、千葉商科大学国府台学会、1985 (昭和60) 年12月31日、1—26ページ。

(25) 注(9)参照。渡辺義雄編、前掲書、206ページ。

形而上学的、宗教的である。また、パースが、行動のパターンとして習慣を強調したのに対して、ジェームズは、特殊な感覚や反応を重視して思想の意義を「結果」(effect)に置いたと言えるのである<sup>(26)</sup>。

それは、結果よりも動機に価値を置いたカント (I. Kant) の善意志 (guter Wille) とは反対の立場になろう。

◎ゆえに、ジェームズは、根本的経験論として純粋経験を配慮し、真理は有用であり、有用な (useful) ものは真理であるという真理論を展開した。ジェームズのプラグマティズム (Pragmatism) は、観念や思想の意義と価値を「結果」(effect)に置いたと、論者は考えるのである。

次に、

3. デューイ (John Dewey) —実験主義—から説明する。

### 3. デューイ (John Dewey) —実験主義—

デューイ (John Dewey, 1859—1952)<sup>(27)</sup> は、彼の著『哲学の改造』 (*Reconstruction in Philosophy*) で、歴史上の合理主義の理性よりも<sup>(28)</sup>、イギリス経験論者達、それも「知は力なり」や「帰納法」を主張したF.ベーコンの「経験」(Experience)、つまり、観察 (observation) や実験 (experiment) に意義と価値を置くのである<sup>(29)</sup>。

「事実に事実自身の真理を語らせなければならない。真理に到達する手段としての純粋な推論というのは、自分の内部から巣を織り出す蜘蛛に似ている。巣は秩序ある精巧なものではあるが、一つの罫に過ぎない。経験の受動的蓄積—伝統的な経験の方法—は、忙しく走り廻って、沢山の原料を集積する蟻に似ている。

(26) 拙著『教育哲学要論—教育原理、道德教育の研究、哲学等—』、高文堂出版社、2002 (平成14) 年4月1日、カントの善意志 (guter Wille) について、157ページ。

カント (Immanuel Kant, 1724—1804) 著『道德形而上学原論』 (*Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, 393—394, 1785. S. 10.) [Felix Meiner Verlag in Hamburg], 第1章におけるカントの善意志 (guter Wille) は、動機が結果よりも大切であるが、反対に、ジェームズは、動機よりも結果を大切にする。けれども、論者によれば、動機も結果もよければ最善であると言えよう。

(27) デューイの生涯について、

ジョン・デューイ (John Dewey, 1859—1952) は、アメリカの哲学者。教育学者。心理学者。道具主義 (instrumentalism)、実験主義 (experimentalism) の立場。プラグマティズム (Pragmatism = 実用主義) の完成者。1859年、ヴァーモント州バーリントンで生まれた。1879、ヴァーモント大卒。1889、ミシガン大学教授、1894、シカゴ大学教授。1904、コロンビア大学に移る。コロンビア大学教授。1908、『倫理学』 (*Ethics*, J.H. Tufts と共著)。1916、『民主主義と教育』。1919、日本と中国訪問。1920、『哲学の改造』 (*Reconstruction in Philosophy*)。1922、『人間性と行為』 (*Human Nature and Conduct*)。1938、『論理学』 (*Logic*) 出版。アメリカ哲学会や心理学会の会長。1952年 (93歳)、死去。

なお、Cf. John Dewey, *The Early Works, 1882—1898*, Volume 2, 1887, *Psychology*, Southern Illinois University Press, 1967, p.7.

(28) 注(23)参照。拙稿、前掲論文 (「大陸合理論とカントの哲学」)、43—61ページ。

なお、Cf. Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, Verlag von Felix Meiner in Hamburg, 1956, A837, B865—A838, B866, S. 752—753.

(29) 注(24)参照。拙稿、前掲論文 (「イギリス経験論とカントの哲学」)、1—26ページ。

なお、cf. John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, Oxford University Press, 1975, p.104.



ベーコンが始めようとする真の方法は、蜂の働きに似るものである。蜂は、材料を外界から集める点では蟻と同じでも、集めた材料に手を加えて変化させ、隠れた宝を生み出させようとする点では、この勤勉な生物と違っている。」<sup>(30)</sup>、とデューイは、その著『哲学の改造』(*Reconstruction in Philosophy*)で記述している。

プラグマティズム (Pragmatism)、すなわち、実用主義のデューイは、ベーコンの経験、観察と実験の意義について具体例で説明する。自分で秩序ある精巧な巣を張る蜘蛛 (spiders) でもなく、走り廻ってものを集めてくる勤勉な蟻 (ants) でもなく、集めてきたものに観察や実験で手で加工して変化させる蜂 (honey bees) の働きに似ているとする。従って、ものを変化させるには観察と実験、人間であれば道具などが必要というわけである。

「科学とは既知の事柄を論理的形式で繰り返すことでなく、未知のものを攻略することである、というベーコンの鋭い感覚が、彼を帰納法の父たらしめているのである。」<sup>(31)</sup>。

デューイは、F.ベーコンの主著『新オルガノン』(*Novum Organum*)での「帰納法」に価値を置く。

帰納法とは、経験的個々の事実に共通する法則や原理を発見する方法である。

それは、アリストテレスの『オルガノン』やスコラ哲学で主張されたように原理から個々に当てはめる「演繹法」と対立する。

こういう点からも、デューイは、イギリス経験論の祖・F.ベーコン (Francis Bacon, 1561—1626) をプラグマティックな知識観の預言者と見てよいと思っていたと言えよう。

さらに、

「経験の軽蔑は、事実の無視を養い、事実の無視は、失敗、悲惨、戦争という報いを受けた。」<sup>(32)</sup>、とデューイは、その著『哲学の改造』(*Reconstruction in Philosophy*)で記述しているのである。

◎ゆえに、デューイは、合理主義よりも、経験の軽蔑や事実の無視は、失敗、悲惨や戦争の報いを受けたとして、イギリス経験論者達の経験の意義を強調する実験主義 (experimentalism) や道具主義 (instrumentalism)、プラグマティズム (Pragmatism)、すなわち、実用主義の立場であったと、論者は考えるのである。

### Ⅲ 結論 (倫理学とは何か [3] —西洋哲学、倫理学と関連して—)

#### 1. 18～19世紀のイギリスの哲学、倫理学について、

(1) ベンサムは、イギリスの功利主義者 (Utilitarian) である。善や幸福は快樂であり、哲学や功利の原理を「最大多数の最大幸福」(the greatest happiness of the greatest number)とした。快樂の量的測定に強力度など7つの基準をあげ、道徳及び立法により国家の建設を意図したと、論者は考えるのである。

<sup>(30)</sup> ジョン・デューイ『哲学の改造』(*Reconstruction in Philosophy*)、[清水幾太郎他訳]、岩波書店、1991年、34ページ。

また、注(4)参照。拙著、前掲書 (『哲学要論』)、80ページ。

<sup>(31)</sup> 注(30)参照。ジョン・デューイ、前掲書、35ページ。

<sup>(32)</sup> 注(30)参照。同書、89ページ。

(2) J.S.ミルは、19世紀イギリスの**功利主義者**である。ミルは、ベンサムの最大多数の最大幸福を原理とし、ベンサムが快樂の量を考慮したのに対して、ミルは、快樂の質をより考慮した点で意義がある。ミルは、「満足している愚者よりは不満足なソクラテスの方がよい」とした。倫理、道徳的な真実の生き方を願望したと言えよう。

## 2. プラグマティズム (Pragmatism) の哲学、倫理学について、

(1) パースは、論理学 (Logic)、三つの観念や三つのカテゴリーなどに触れ、知的概念の意味を決定する方法であるアメリカ、**プラグマティズム (Pragmatism)**、すなわち、**実用主義の創始者**と、論者は考えるのである。

(2) ジェームズは、根本的経験論として純粋経験を配慮し、真理は有用であり、有用な (useful) ものは真理であるという**真理論**を展開した。彼のプラグマティズム (Pragmatism) は、観念や思想の意義と価値を「結果」(effect) に置いたと言えるのである。

(3) デューイは、合理主義よりも、経験の軽蔑や事実の無視は、失敗や戦争の報いを受けたとし、イギリス経験論者達の経験の意義を強調する「**実験主義**」(experimentalism) や**道具主義** (instrumentalism)、19～20世紀の**プラグマティズム (Pragmatism)**、**実用主義**の立場と、論者は考えるのである。かくして、18～19世紀のイギリスの哲学、倫理学と19～20世紀のアメリカのプラグマティズム (Pragmatism) の哲学、倫理学とでは、前述の如く、時代状況の違い、イギリスとアメリカという国家や社会、場所的状況の違い、人々の生活状況の違い、各哲学者達の主張の中身の違いなどで各々相違はある。しかし、双方の共通点としては、大陸合理論よりもイギリス経験論を重視して、快樂の量や質にしても経験的であり、道具主義や実験主義など演繹法よりも帰納法の活用に基づくこと、実用的な功利の原理や最大多数の最大幸福、有用なものや実用主義などの観点で以て、**哲学 (Philosophy)** や**倫理学 (Ethics)** に意義や価値を置いたと言えよう。

さらに、前々回の論文「**倫理学とは何か [1]**」<sup>(33)</sup>や前回の論文「**倫理学とは何か [2]**」<sup>(34)</sup>に引き続き、今回のこの論文、「**倫理学とは何か [3]**」では、それらを分析や総合し、一応全体的に**体系付けを試みた**のである。

論者は、本来、東洋哲学、中国哲学の**孟子の哲学**<sup>(35)</sup>や**孔子の哲学**<sup>(36)</sup>などを発表してきたが、その際に西洋哲学や倫理学も気がかりであったので、些かりサーチ (researches) して記述したわけである。

よって、このような内容により、論者の「**倫理学とは何か [3] —西洋哲学、倫理学と関連して—**」(What is Ethics ? [3]—Connected with Occidental Philosophy and Ethics—) の今回の論文は、過去だけでなく、現在のもとより、未来に向かって、多少なりとも**意義と価値**があろうかと、論者は思考するのである。

………… {2009 (平成21) 年 2 月 19 日 (木曜日), 原稿提出} ……………

<sup>(33)</sup> 注(1)参照。拙稿、前掲論文 (「倫理学とは何か [1] —西洋倫理学と関連して—」), 95—115ページ。

<sup>(34)</sup> 注(2)参照。拙稿、前掲論文 (「倫理学とは何か [2] —西洋哲学、倫理学と関連して—」), 51—71ページ。

<sup>(35)</sup> 拙稿「孟子の道徳哲学論—四徳論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第37巻第1号, 千葉商科大学国府台学会, 1999 (平成11) 年 6 月 30 日発行, 223—240ページ, 等。

<sup>(36)</sup> 拙稿「孔子の倫理哲学論 (4) —道徳論を中心として—」(論説)『千葉商大紀要』第46巻第3号, 千葉商科大学国府台学会, 2008 (平成20) 年 12 月 31 日発行, 1—12ページ, 等々。

## 〔抄 録〕

倫理学とは何か〔3〕  
—西洋哲学、倫理学と関連して—

浅 井 茂 紀

この論文は、目次、Ⅰ序論、Ⅱ本論、第1節18～19世紀のイギリスの哲学、倫理学、1. ベンサム (Jeremy Bentham) の功利主義、2. J.S.ミル (John Stuart Mill) の功利主義、第2節プラグマティズム (Pragmatism) の哲学、倫理学、1. パース (Charles Sanders Peirce) —実用主義の創始者—、2. ジェームズ (William James) —真理論—、3. デューイ (John Dewey) —実験主義—、Ⅲ結論 (注付)、から成立している。

18～19世紀のイギリスの哲学、倫理学として、ベンサムやJ.S.ミルは、哲学や功利の原理を「最大多数の最大幸福」とした功利主義者である。快楽の量や質を取り上げて、人間としての道徳や倫理的な生き方を問題にしたと思考する。さらに、アメリカのプラグマティズムの哲学、倫理学として、パース、ジェームズやデューイは、実用主義として、真理は有用なものであり、実験主義 (experimentalism) などを強調したことを説明する。そして、これら全体的な体系付けをして、その中身の意義と価値を考慮した一研究論文である。

—Abstract—

What's Ethics?〔3〕

—Connected with Occidental Philosophy and Ethics—

ASAI, Shigenori

This paper consists of the following articles.  
The Contents, I. Introduction, and II. (i) Philosophy and Ethics in Britain in the period ranging from the 18th to 19th centuries.  
1. Jeremy Bentham's Utilitarianism, 2. John Stuart Mill's Utilitarianism,  
(ii) Philosophy and Ethics of Pragmatism,  
1. Charles Sanders Peirce—Founder of Pragmatism—,  
2. William James—Theory of Truth—, 3. John Dewey—Experimentalism—,  
III. Conclusions (with notes)

Bentham and J.S. Mill are the Utilitarianists who converted the principles of philosophy and ethics in Britain in the period ranging from the 18th to 19th centuries into 'the greatest happiness of the greatest number'. By taking up the amount of pleasure or quality, they make consideration that moral or ethical ways of living for the welfare of human beings were discussed as a problematic point.

Furthermore explanation is made in purport that Peirce, James, and Dewey regard truth as a useful one from a point of view of Practicalism for philosophy and ethics of Pragmatism. And emphasis is placed on the insistence such as experimentalism.

Finally by systematizing the whole of the descriptions, consideration is also made with the significance and value of the contents.